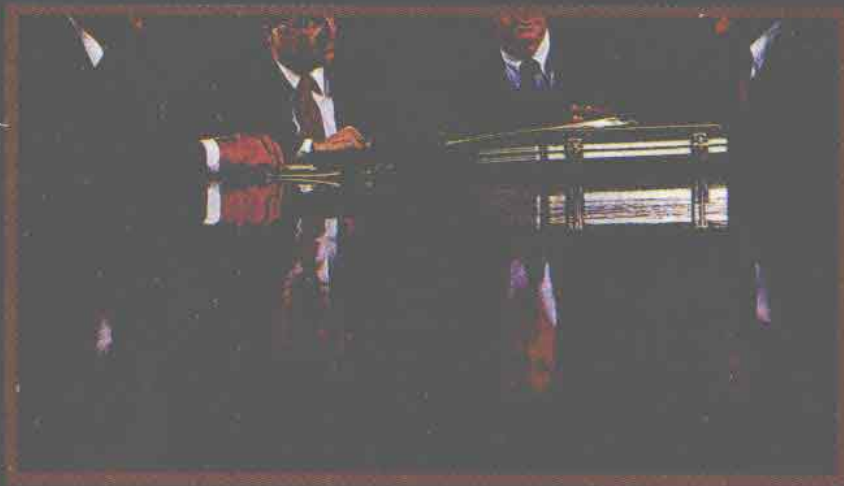


by Joh Sasaki

佐々木譲



愚か者の盟約

The Pledge Of Fools

おろ もの めいやく
愚か者の盟約

さ さ きじょう
佐々木譲

© Jo Sasaki 1993



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1993年8月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社廣済堂

印刷——株式会社廣済堂

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185540-9

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

文庫

愚か者の盟約

佐々木譲

蔵書

講談社

目次

愚か者の盟約

9

解説

佐高信

427

愚か者の盟約

本書は、冒頭の一文字から最後の句点にいたるまで、完全な虚構である。モデルもないし、現実の再構成でもない。ふつう小説にはこのような断り書きは必要ないものであるが、とりあげた世界の特異さから、本書には実在する個人なり団体なりを、現実の世界と同じ固有名詞でいくつも登場させざるをえなかった。このため、誤解を招くことがないよう、あえてこの文をここに置く次第である。小説家は作中の登場人物に、イサドラ・ダンカンからの恋文を受け取らせることもできるし、ヒトラーを暗殺させることもできる。作者はその特権を、現存する公的な存在に対しても——もちろん節度をもつて——行使したのだと理解いただければ幸いである。

襲撃は午前七時ちょうどだった。

港の東側に見える富士製鉄室蘭工場から、朝七時の勤務交替のサイレンが響きわたった。まるでそれを合図と決めていたかのように、造船所前に一台の幌つきトラックが突っ込んできたのだ。

「きたぞ！」

「スト破りだ！」

構内に集まっていた労働者たちのあいだに、鋭い声が飛び交った。赤い組合旗の立つ正門の内側で、若手の工員たちがいったんきつと散った。

トラックは工場正門の鉄パイプの門扉もんびに激突した。鉄パイプ製の門扉ははねとばされ、片側はぐにやりと曲がって門柱からはずれかけた。

トラックはいったん後退した。その荷台からすぐに男たちが飛びおりてきた。それぞれに棍棒や鉄のパイプを手にした、十五人ばかりの屈強そうな男たちだった。

門の内側では、若い工員たちが再び戦列をつくった。工員たちはみな保護帽をかぶり、垂木^{たるぎ}で武装していた。年配の工員や女の職員たちのあいだから悲鳴が走った。あわてて工場の建物に逃げこむ者もあった。

襲撃者たちの中で、怒鳴り声がする。

「やっちまえ！」

「赤は殺したれ！」

襲撃者たちは門扉の隙間から殺到してきた。ピケットを守っていた工員たちは、これを迎え撃った。たちまち空気が切り裂かれ、激しい衝撃音が響いた。棍棒同士がぶつかり、鉄パイプは金属音を散らして、あたりの空気を破裂させた。怒声と悪罵が飛び交った。

襲撃者たちの勢いに、短い時間、工員たちは吞まれた。垂木で懸命に防戦しながらも、工員たちは少しずつ後退した。ほかの労働者たちが先頭の工員らをうしろから支えようとしたが、襲撃側の気合いのほうが、わずかに勝^{まさ}っているようだった。ピケットラインは、いったん突破されるかと思えた。

しかし工員たちも、腹をすかし、いきりたっていることでは、会社側が雇った男たちに劣るものではなかった。最前列の工員が倒れるたびに、すぐに背後から応援の若手が前に出た。年寄りや女も含め、ストライキ参加者のすべてがピケット防衛隊と考えるなら、襲撃者側は連中の十倍

以上の数の工員たちの頭を割らねばならなかった。

襲撃者の中のひとりが、大声で指示を出している。復員直後と見える、すきんだ顔立ちの三十男だった。彼が襲撃者を率いているのだろう。

「野崎ってのはどこだ？ 赤の寺久保って男はどうだ。出てこい！ 殺してやる！」

懸命に応戦する工員たちの中から、小柄な、しかし肩幅の広い男が飛び出していった。短めのまさかりの柄を手にしていた。その工員は顔を左手でかばって相手かたに身を投げ出し、そばにいた男の顔を、無造作に横に払った。血の飛沫が一瞬宙に散った。

真正面の男が棍棒を振りおろしてきた。工員はその棍棒を受けとめると、振り向きざまに相手の顔を殴りあげた。何か堅いものが崩れる音がした。

「野崎はおれだ」捨て身で飛びこんでいった工員は叫んだ。「殺せるなら殺してみろ！」

いま顔を殴られた男が、その場に膝から崩れ落ちた。襲撃側に一瞬ひるみが見えた。

工員たちは、連中のひるみを見逃さなかった。

「うおっう」とどよめきがあがり、工員たちはみな一歩前にでた。

また激しく棍棒同士がぶつかりあった。木っ端が飛び散り、工員の保護帽のいくつかがはね飛んだ。肉や骨への、鋭い衝撃音も続いた。はずれた門扉に足をとられて、襲撃側の男たちが二、三人、地面に倒れこんだ。工員たちはさらに前進した。倒れこんだ男のうちのひとり、四つん這いになって門の外へ逃げ出した。

それが大勢を決めた。襲撃側はかんぜんに劣勢にまわった。いましがた地面に崩れ落ちた男

は、ふたりの男に抱き抱えられるようにしてうしろへ引っ張られている。頭から血を流している。コンクリートの地面に、点々と血が散っている。工員たちは再び低い叫び声をあげて前進した。

ならず者たちは総崩れとなった。うしろのほうから、我れ先にと門の外へ逃げ出した。ボス格の男はみずからしんがりを受け持つかのように、工員たちを牽制しながらあとじさった。男が門を抜けるところまできたとき、その男と野崎と名乗った工員が、三步の距離で向かい合った。

野崎がいきりたつ工員たちを制し、男に言った。

「逃げろ。殺されるのは、お前だぞ」

門の外で、トラックの運転手が叫んだ。

「もういい。乗れ！」

ならず者たちはトラックの荷台に殺到した。ボス格の男は、いったん憎々しげな視線を野崎に向けると、地面に唾を吐いて門の外に駆けだした。荷台から手がさしだされた。ボス格の男はその手をつかみ、トラックのステップに足をかけた。トラックは急発進して、工場の正門前から遠ざかっていった。

ピケットラインは守られたのだ。五日目に入ったストライキの、最初の山場は労働者側の勝利だった。構内に集まっていた二百人あまりの労働者が歓声をあげた。トラックめがけて、いくつか小石が飛んだ。

戦争が終わってほぼ一年後の昭和二十一年七月十四日、北海道・室蘭市のことだった。

ピケット破りのならず者たちを撃退すると、野崎は構内に集まっている仲間たちに歩きながら声をかけた。

「怪我したやつをうしろへ」まだ息が荒かった。「ひどいようなら、すぐに病院へ運べ。それから、防衛隊は交替してくれ。これで終わるかどうかはわからんのだからな」

そういう野崎も、額から血を流している。左頬に擦り傷ができ、目の脇がはれあがっていた。工員服の胸に、赤い斑点がついている。

野崎鉄二郎。前年末に結成されたばかりの、組合の書記長を務めている青年だった。まだ二十八歳だ。

ひとりが野崎に向かって言った。

「野崎さん、あんたも手当てしなきゃ」

野崎鉄二郎はげんそうな顔で自分の額に手を当てた。

「気がつかなかった」野崎は指についた血を舐めて言った。「たいしたことはないさ」

ひとり、開襟かいきんシャツを着た長身の男が、野崎鉄二郎に近づいてきた。紺の菜っ葉服ばかりの男たちの中で、ひとりだけ場違いとも見える男だった。額が広く、眼鏡をかけている。寺久保浩文。北海道教職員組合の活動家だった。歳は野崎鉄二郎より一歳下だ。

寺久保浩文の顔はいくぶん青ざめていた。

「荒っぽいことになってしまったね。あっちのかげで、息をとめて首をすくめてたよ。みんなの

怪我はだいじょうぶだろうか」

野崎は陽気に答えた。

「うちの職場は、もともと荒っぽいんですよ。職制が見習いの職工を拳骨で殴るなんて、日常茶飯ですからね」

「これ以上、怪我人を出したくない。ストライキもひきどきかな。戦術転換を考えておいたほうがいいかもしれない」

「いや。それだけ向こうも追い詰められてるってことですよ。もうひと踏ん張りで、あの豚野郎は折れてきます。団交の席に着くはずですよ」

「こういう暴力沙汰のせいで、こっちの士気が落ちるってことがなければいいけど」

「きんたまが縮んだやつもいるかもしれませんが。だから発破はつぱをかけてやってください。ここでひきさがったら、元も子もなくすって。おれらがぜったい勝つからって、そう自信をもたせてやってくださいよ」

ひとり、まだ十代と見える工員が、ふたりのそばに駆け寄ってきた。

「野崎さん。うちからいま、しらせがありましたよ」

「なんだ」

「産まれたそうです。男の子」

野崎の顔が輝いた。

「そうっか。男の子か」野崎は寺久保に顔を向けて言った。「かみさんの予定日だったんだ。息

子だってよ」

「母子ともに健康ですって伝えてくれって」と、少年工。

「おお、わかった、わかった。すぐに赤ん坊の顔みたいけど、だけとおれ、いま離れるわけにもいかんしな」

寺久保浩文が言った。

「行ってやったら。きょうはもう、だいじょうぶだろう」

「そうだな。向こうがあらためて人集めするにしても、半日はかかる」

「八時になれば、ほかからも支援がくるよ」

「ああ。じゃあ、あとでちょっと顔を出してみる」

「はい」若い工員は工場の建物のほうへ駆けていった。

「なあ、寺久保さん」野崎が言った。「息子の名前にあんたの名前から字をもらっていいか」

「ぼくの名前から？ そりゃ光栄だけど、でもどうして？」

「あんたのオルグのおかげで、ここまでこれた。組合を作って、ストライキも打った。ひどかった職場がいくらかましになったのは、あんたのおかげさ。ほんとうにありがたく思ってるんだ」
「ぼくはほんの少し助言しただけだよ。それよりも、野崎さんがしっかり組合をまとめていることのほうが大きい」

「謙遜するなって。字、いいだろ」

「お好きなように」